

街道と言えば頭にすぐ出てくるのが東海道である。次に中山道とか日光街道とかだろろうか。

これらは雑誌や報道でも話題でも取り上げられ、途中の宿場町の町並みが紹介される。これらは江戸時代の5街道と呼ばれるものです。それ以外の街道と言えば、伊勢街道、金比羅街道、秋葉山道など当時人気の神社仏閣などの参拝道で地元の人にも親しみのある街道です。それ以外には、紀州街道、西国街道、薩摩街道、羽州街道など地域の主要な道で、江戸時代に参勤交代にも使われ途中に宿場などが整備され本宿跡など今も当時を偲ばせるものが残っています。

このあたりまでが、一般的に取り上げられる街道である。

これ以外は、地域の残る街道で、あれが街道？と思う街道もある。

街道とはどんなものか、街道と呼ばれる決まりはあるのか。

「全くない」

伊勢街道は東海道の三重県・日永追分から伊勢までの道を言うが、皆が皆、日永から参詣をスタートする訳でもない。熊さんの家から出て細い道から町の道に出て地域のメイン街道を出てやっと伊勢街道に入ることになる。細い道は街道とは呼ばれないだろうし、町の道は町の道だし、メイン街道はもう街道とは呼んでもいいのかもしれない。だけど伊勢街道に入った時には街道実感があるだろう。宿場も途中にあるし、別れ道には「道しるべ」もある。何せ通る人の数が違う。

全国府県の街道の調査報告書（歴史の道調査報告書）に載せられた街道はいろんな街道がある。府県が勝手に選んだのだが、選ぶ人も「この道は載せよう」とか「この道を載せたらこれも載せないといけない」とか「この地域ばかりの載せたらバランス悪い」とか、裏事情を感じてしまう話もありそうだ。

そんな舞台裏から登場する街道達はそれだからその土地を感じてしまう街道が多い。群馬県や長野県などはこれでもかとばかりの街道に溢れている。逆に高知県や長崎県のように数本だけで今後の期待が大きい場合もある。群馬県・長野県に街道が多いわけでもないし。高知県・長崎県に街道が少ないわけでも決してない。人がいて村があり町があれば、それを繋ぐ道は必ずある。

私の生まれた家の前の道は、小学生の頃はまだ舗装もなく、道に穴をほってビー玉で遊んでいた。みんな「きゅうみち」で遊んでいた。ちょっと離れた所には「新道」があった。大人になって「きゅうみち」が金比羅さんにお参りする道だと知った。それを知った時、小さい時に登って遊んだ常夜灯や道端にあった道しるべが輝いて見えた。